風俗文選

賦 說解記
譜 紀行序

三

内閣文庫
二〇二函 一二架 五冊 二七五六〇號 類

内閣文庫
番號 和 27560
冊數 5 (3)
函號 202 305

国立公文書館
National Archives of Japan

北海道

明治十二年購求

国立公文書館
National Archives of Japan

蓑虫説　素堂
閉關説　芭蕉
柴賣説　丸北
名阿段説　許六
師説　許六
出女説　木導
雑説　不知作者
愛猿説　万子
竹字藤説　朱廻
草苅説　露川
山芋説　吾仲
朝霄感説　毛紈

○説類

蓑虫説

素堂

みのむしの、夢のおぼつかなきをあはれぬ。ちちよ〳〵と
なく。母よ母なるこゑかな。いかに作〳〵鬼のかなしむ。
情に如り生れさるべしやとて、しゝ鬼なりとて、聲堂を文
て業あるべしとて、むしの業なりんと。
之の法。夢乃おぼつかなくて。がけ、生命をあはれ
姥。松虫をあはれ乃歳なるがねよ。蓑毋る花野をなよ。蓑
よを緒を吐よりわ。からゝじて賜の子る死と。
兄のむし〳〵。ぞ脇まして部なるをあはれよ。胡蝶を

死よりそうしてもいとなむよりわ淫事おそるべし
なるべし。誰がなるべしとなれを思ひあまくしるべし。
三の母こしかくもうかなるを情ぶるべしに一滴を
きいてもうるをとうるはは一家をなるをいきばつれおすこうれ
なれつつ。孤地おのおのきはひあるもの。おのおのの人のなるべし男を
そこなふ。ものしめがすこうきなるこうもの。
義法。漁父が一家をあげさえ人をうるふ回し。漁父を魚
をうるはきまで。死活よりも魚にて。紙をうれて。酒をあて
むしもるたびすこうをを泊乃縁あるを。多陽を漁をる
一味あり家をさまうけしる所。
みのむしし。むしをいる神ぬしをむ回義乃縁の者

かろ神をやいをるをまた誰をしかしんをもうの
うくあるわ。魚を尺くく深くく入漁照り義をもて所わし
もふるはをれるをれまざるる也。
義法。をを柳をつきをめしうわ。楊り義をすべ
て。家乃人を紀。嫁を教しく凡をををして。家業を
感をををむ。おがらしのはを。家螢より身をなるふる
蟲も船もなるをもこうや。

又以男文字述古風

蓑虫ろし　　一絲欲絶
寸心共空　　似寄居狀　　無蜘蛛工
白露井口　　青苔被朝　　從容侵雨

飄然乗風　栖鴉莫啄　家童禁叢
天許作隱　我憐称翁　脱簑衣去
誰識其終

柴賣説

丸北

○柴賣ろうまうるは。小野。細河。そうまの。雄まの。矢曽
小原。花山を掛け細しわ。光おう。源山栄。それが麓よ
折らくといつるまとめるあるもの家をなしんかの秦
乃毛女が買しまも似ど。河陽の焦まが仁もあまど。唯世俗
まのうしがめて女を加よ。わくこ神を賛。史を山ま入
くこ神を撫る。ひを見ま昭せども思く。ひを流ま源

きとも白しさしがら是礼門院乃女房。阿波乃典侍の名
などいふ人乃名おあるまやあるまやきひくちを番ちるま
袴とはくろひ結して二布をあ〜りまきまあ見ひ
ちあきけ〜ま。白毛雪ちうひ〜ちくうし侍
むすいさま。幾男乃ん紙ちを。まを獅蹴山麓を載
ま。茅を虎杖をるがひ。りちを。この山ばくしなぬ
乃乃ほど一里二里。ちくくちこ雪まよあ中て。肩ちる
業もなく。我の陰まを。腰をかまび。柳。京の所ま
ちりがまを。白乃ひまもちぎりて大路小路ちを。
武ちお海して門をを紀。あるひを出乃方ま来を
志海ぐ〜く。小野の前をを。月乃夕をつまを。おくま

て、ゐなかの面をかぶりてこゝ[illegible]こゝ[illegible]失
しぶんるをぞ[illegible]あるべきよ。東[illegible]箱の笑ひく回[illegible]
ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]
へ[illegible]傾城[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]
はをるゐをなびとゝ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]
ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]

乃ち[illegible]より他見をもん世[illegible]
[illegible]廣男よ心を怒り。溝洫よりおこ[illegible]
[illegible]し南華老仙乃唯利害を彼物し[illegible]
きて閑なるもしてもの老の業とし[illegible]
乃ち[illegible]あり。[illegible]他の[illegible]業をさすもの[illegible]
[illegible]を閉て杜[illegible]門を[illegible]
なと。貪を富つとくして[illegible]
[illegible]戒とせん。

[illegible]門の位

師説　許六

[illegible]師を道とは子へ業を受
惑を解[illegible]とさ[illegible]
[illegible]
[illegible]

道の弱るとしてなしとせず。世世佛法乃師とする人を
ゑらぶる。大法よりもそれ相應を捨て貴賤をあらそひ利
益を説て家を苟うをもとせり。如来のおしへ
孤(ミナシ)なりて邪教のみ盛なるゆゑに人おろかにして乃
淵源よりいとく。ものを貪欲をうゑ果てらんとおもふ
人。又ちまはりのまたの輪廻乃因果。父母おもつけ
子孫思惟なくわもそしまた利益しまた相法師
つぶらとなりて。ちらしちんかうる涼幾年ぶも
ちりしだし相とよ。何事ぞ新奉とくいと
なわきわこれもいとへ乃師匠よれ物へられど世を渡る
四すぎなり仏ば。巫醫樂師百工乃師を求ひるかうるを。

又ちとう寫仏乃法禮讃。讀書ぞ藏乃師とする人
おもひ出せば。あつまりてとりこれ仏乃師を先達とし。
ちすまと強力と名は。仏乃師とする人ちを寵ゆ
ひてでもすまを求めとはいかなれ。伊勢富士乃神藏の
人を師といつたなるゆゑ人〻ちっちもっちの道真実を
教へ。仁ちもとはいとど。ものの書の為の利を感し
てちこ二来者おの乃使を給ふ。世間乃金。書物乃新利
もうけさる。和文乃指南。歌乃師匠を求へ。教会乃をさなく
業を倦ちわさる世の仏法をもて伝ふして教ゆる人もねうこと。
中にてあふ人も行ねるうなしこと小機の師を
ゑ。貧乏滅老人ちわをもて貧乏ちまとなれ。花の本

をこの道を継ぎ天下に名高くいひなしたる祖師の厨子
小袋に長年の看板をうけてあるこの道を説く家
迷ひくるとあるこの一座の中に奥深き花のもと
をいとうべき時芭蕉翁ひとりの中にて世界の
名を受けたりと解。これをまた家道といひなし。
今のこの人をこの家に一生涯の間に見
聞せざるこの人実伝の名をあやまり誤りひとり
惑ひいるを人をもこの人にまきこむこの人。
時にこの人ひとりの人を自己の
芸風を変ずるをこの人にまきこむ時に
二つもこの人を始めとの時の俳諧を
やはりこの道を継ぎ者の向人ばかりをかぞへて
血脈道統をもとしたる祖師の家道
の流派をこの人の俳諧をこの人とのべ
先其所のこの人をこの人べし。其の俳諧一人なれど。
一弾すべて道を迷ひ言下に悪を解てあるべ
ものをとどまらぬなれば義を中に無遠。第よりこの
ごとくこの人をこの人の友禅無命よりつかの祖。
洗濯先義の家よりやこの人の稽古
今のこの人の師説低つくを集の俳諧の
ものをこの人をこの人のひとりをこの人の
ものを待義の眼をこの人の師あるべきやこの家

かんてぷりてるまるへりべし。

名阿陂説

許六

○名たのもしあとつまてぷ文字の得をあ一しるを社
書新ごゝ極しいふ文なる神ど。通学ありて己乃色
ともよむもの書神ぐなくても事ハ名書ごゝや。
名間乃ゐ世なるハ一也もあるもの。さ神ハ味噌播
ゐる所をもぜ所播ふ伯をゆしれ子ゑて一ゝ
ありごゝ我名間ゐあるもやさるを今乃人名ゝ
天光ゆゐもつまゝ至てるとおもるゝとんたし
きふゐ名をあるゝ天ゑ有ふ日ゝや同ゐさけゝ巣

乃ゐ一まさも呼へき人とハ人ゑまる。教識とハ顕密の名。
鍬巖とはめてもゆまとハ。禅門乃号ゑ天も一流一流の
名間あるゐ伯ゐ乃人の名はくゐ。深ゐ心ゐ。
歌を教して名ゐ乃名ゐ一白黒をはくゐを名を
宗くむ。ゐ一あ字の乃ゐ。ぬゐを心をゐくゆ。ゐ何本
端乃類も。淵ゐ。あ紀。一笑志計もあゐわゐ清ゐ
ゐ一ゐ小伯ゐも阿陂ゐく系をゐむ。ゐが濁ゐゐむ。
杜ゐグ撩蚊ゐ筆一きゐハ。名はゐ伯説はゐ
かまゐかゐ一ゐするきかくゐ。

出世說

木導

○頃ハ頃ほとゝ。唐人乃一巻を寫して。白振のみが
ゝ乃世ゝ。赤鼻乃やうなるべし。首よりゆふ類あ
まし。かゝるよりゝ西なりしん。西乃名内。蒙世の西藩
柄枝。干飯。白人中美乃老ゝ。大ひ丁種ゝ有く。
位階のこゝろ下ハ金張のお蒙なるべし。それとかゝも
して、軸搖よゆるさ軸。老人のかゝるよりなるゆ
ゑ。ゆゑ細るて。おほくふるこゝ蒙ゝ。ゑる道人
ゝ見あ逆君あ。て。張よ人乃魂をそゝ。ゝ乱ゝ
ゝ。ゝて。ゝ。ゝ。ゝ

き糸乱れて。日さしも心忙いせわしき。閑れの浦つ波
こをてハあくるしき暫時よ。京洛の学むすびさげて業
乃手ハ代まぶい家ゆゑ。門の柱ようち添さるハかまこが一
世の勢ひなるべし。いかなる人かやどりて。ひとりわれ茶
もうんもきらびとまれ。もうんやう神仕る。あらハきき
もしき業やりてよなづくまこ。ら同じ乃矣のぬしつけ
ひへ。神妙乃手柏よ。軽忽の事を上く。為事
をこそ。油断かよ出そる指そをのりはじわるぬふ
なるべし。青夫よ。濃ハ屠を引ひて。為用ハ赤瞬
て飛。御油。長流乃金盛もひしうまなれ果。姫女無ばよ
うを出されやく。これ油ハもなりしぶ。ふるこの相指。ん

月為名流乃吟も。此君よあいぬうしみをて。ひ一こ
ゆ泊よ。宿かさぬ君もなくうるて。今ハ出ぶ乃ふうハ
なるぬ。伊勢路乃彩色ハあるめがちして。大津為法
をかしうひ。ひべし。名相乃まぶくなるひハ。ひ川と
なくよ。ふる暴く。鼻乃下の燥音も。ま。ま。ま。ま。
乃小車ハ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
袋さ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
飾もせぬ。ま。神と。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
夜宴。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
庫乃小陰よ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
大服よ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

を定め。給分の加増ハ赤貧をこぎ屋。抱屋敷ハ
ぜ。古道具も売るハなりしをぜ。はすの行衆何ようなん。
育ハ普賢ぼさつもなわ者共例も有まじ。今
をすこし遠ひあわて。果ハ駕籠屋の毒よこゝ
痩ゴあるゝ差物間淵ゝ。ぜ渡と終る
赤赤とでも学果なし。絆屋の地獄すでハあまと。
お女乃地獄のはなをきゝ。そゝハ方地獄の門くゝ
をゝしゝ。又あハ秋なるべし。

雑説

不知作者

○人物會熟ハ。そゝ人物會熟の粉骨なる而て他
出ハ苦ハ。そゝ出ハ苦ハのとゝ秋をゝる不よゝ。
物皆をゝ上ぐるのみ乃絶なる而よ。ゝ秋果るも云
なるるゝ。ゝ。驛馬ハ安易よ例ゝ。他尾ハ
仁義よゝ。ゝ。莊老ハ高云ゝ。神仙ハ霊異ゝ
例ゝ。他黄叔舟ゝ貫ゝ。楠正成ゝ忠ゝ例ゝ。
決ゝ。ゝ。たゝ秋。ゝハ秋ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ秋。野老ハ。ゝ。ゝ。長ハ。ゝ
ゝ。ゝ。秋ハ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
盗賊の絶ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

やうにかくるべきなり。昔より風雅に俗
の人者は本末。雪月花の三ツ俗
面白き。先師芭蕉翁ひとり俗を
脱して。世俗を風雅の中に入れ。
武乃松風を耳のうちに聞きしよりの
さゝやき。二千余年の流れ。
流の末。風雅の正道は面白き物なり。
乃閑人日々にて。其間に俗
なるべし。源光ハ此の志を考ハ
脱俗の教なるべし。東都本所ハ
俗世千歳末世ハ風雅の情
なるべし。嵐雪ハ

横笛乃月なるべし。松風乃閑関なるべ
松風を横なるべし。俳諧ハ
梅の紙面小俗世。許六ハ文章なる。さ
芭蕉流なるべし。其流を汲む人も
あるべし。学を問ふ俗世。梅を
を人なるべしもの世ハ。
愛梅説

全篇説梅而無梅字。
終句以二一梅字一結之

方子

○廣原楚辭ハ世を。梅ハ。西の對
乃ちなり。孤山のたそれ

が。陳(エイ)氣横(ヨウ)解(ケ)をうはせて。心(シン)酒の名(ナ)に負(オ)はせやうにさ
かをうる。おのづから恒乃自(ヒ)いなるまめ。谷の蘭(ラン)うる
うふ。千歳を。何乃高枯(ヒ)ぶかたちなるふ。神皆をたこうび。
十月江黄八天氣醉(ヨ)ゐうるよ。極て。酒家乃樹(ウ)とわ(ア)時
を。の天(テン)籠(ロウ)をうる。神(シン)酒の家(ヤ)乃中よ。名(ナ)数(スキ)乃殺(ヒ)
も白いをとぶし。酒(シュ)盃(ハイ)ぶ折(フリ)巻(バシ)。皆(ミナ)左の家(ヒ)。数(スウ)陳(チン)ず家
盤(バン)乃粒(ツブ)者(ギ)ま。深(フカ)花の汁。ま皆かまが。閑(カン)閑(カン)情の
ぶ(ハ)の絡(ハ)なるべ。彼(カレ)説(セツ)よ。ひ(ア)ら。牡丹を花の中
なる物なわ。菊をむ乃閑(カン)閑(カン)なるものとを。
ふ(ア)ら(ア)ぶ(ア)ら(ア)ぶ(ア)する人(ヒト)まれて。蓮をむ(ア)し(ア)ま(ア)
なる物なわ。ま(ア)ら(ア)を閑(カン)閑(カン)乃中よ。菊を閑(カン)

を(ア)ら(ア)ら(ア)ま(ア)梅(ウメ)ハ花乃閑(カン)閑(カン)物をぬし(ア)ま(ア)ま(ア)也。菊ハ花を閑(カン)閑(カン)
ぬし(ア)ま(ア)ま(ア)物をぬしまるる物なわ。

艸字藤説

五老井 四絶之一也

程己

○草郭て宿(ヤド)る蔦(ツタ)を大和路(ヤマト)の。蔓(マキ)となりて。洲(ス)落乃
かくれ。ゆ(ア)ま(ア)ら(ア)物(モノ)を折て。遠(ヒ)ま(ア)ら(ア)かざ(ア)ら(ア)。大(オホ)清(キヨ)の
閑海なるべ。高松よ倚(イタ)掛(カケ)して。傳(ツタ)乃ゑめ
ひ(ア)ま(ア)梅乃情よ。ま(ア)物(モノ)ハ。蛇(イタ)て。斧をとゆ(ア)ま(ア)ぶ(ア)ひ(ア)
な。蔦の性(セイ)酒をこのし。心(シン)を。雪よ餅を。ま(ア)ぶ(ア)
何の奥(オク)あわて。ゆ(ア)ま(ア)ら(ア)ま(ア)ハ。ち(ア)ま(ア)ま(ア)ま(ア)ぶ(ア)。

京字萩と萩の中枝下垂するゆえ
色こまやかなる紫なる藤のうつくしきを
咲ゆるるとき。房ごとに巡りてぞうつくしやまれるなり。

折節（をり）ごとの情（こころ）かなしや萩の花

草苅説

露川

○松の葉ふきはらはれ常磐あらはれぬ新のまれ
しきゆゑ。ちとよはへ。ぐまなれて。おりかたもなる叢
なれば。新もなく。元宵もなく。げこうもなく。
ぶつてもはるらんさで。はやく草はのれば。あのるけ
ものの。ぬるの。ぬるの。ぬる

清く称と呼て。ちと功もすくれて。ちと味も次也。秦楚よ
り玉延といひ。鄭越よりハ土藷と号す。杜若叢中の活を
こゝろゝゝ。陳尚書ハ玉延の賦作る。潼山の幕薯ハ。二
月旅ゝまゝ。ど地を変ず。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ

さ神ど繪よ出る色よんを動くり。鉢皆鉢よすりかを
心沈ぜら神てゆげて奥面ぬ者を面（夏中の和あり
て。貴家をぬ抱しなどさ神。大欠る魚魚をたげし。田楽
乃燒るを待りよ。花人の和伽よあこれて。楽風燈よ額を
位をか。くる人者の一ぬしいふるすを。
風の接梅しなば。花を風有いまかまぬしとなりを。首
宰ヨ子が是家も。夜ふしあてよ称てんり。たり人乃燒
をを伯といふる。楽よゆへあれ。今陽いきん。ものし
五十て死をとりもも。百まの年寿頭よ者りへ。是あり
落鳴。者るよはるまる神と。夜和る嗜者。細よて是を。
やどんなさんををふとしとおほしをれ。

獲麟解

許六 長雪隱解

藪醫者解

文村 許六

○解類

獲麟解

許六

五老井 許六 選

○魯乃哀公十四年。西ヘ狩して麟を捕とられ。孔子大きに
なげきかなしみて。春秋をとぢ。文麟ハいつまでの付おて孔子
をそんぞんしのよすがとぞいふし。麟ハ愚にして大聖のかゝ
をうけて命をまもり。麟ハ四靈乃随一にして。物者る
年をもつぞう物ゝ人おそるゝもゝ又ゆゝしき孔子をうけ
物をよろこばせ。牛馬の生物をこなくるしめやあ
まひ。これも又ゆゝし。麟うせ。道おこなつ物ざるなり
ゆゝ。道を麟に乃ことあり。聖人の上ゝハなきよ。うゝ物

又いづれ。麟ほうよりは。聖人も苦しうせぬよ例にても
あるべし。あるといひ聖人うせぬよ例あるとも。道はまくらを
所をも。見てもなきくよりも。儒道をもつくしと
おりよりそれは。麒麟を生ずるとは人をあぐむ
べきの。異物ゝ。きばは釈迦。爪は孔子。角は
ほとけ。音は。のこれはぬるくゝ。ゝ。着おくて。
釈ともなれば。梯子。麟角。ほとけ。ほとけ
なり。さればこれ仁義乃ほとけ。おいぬ角もあわぬべし。
麟をすぬ聖人もあわぬ。又聖人をぬぬ麟風もあわ
ぬ。ひとりこの音。孔子。孔子。孔子。
おれも神代よりあるべし。南門百年後をうたがはぬ。

おなじく麟風。おなじく取ぬ。たわ。たわ。
弱ハ付と。麟。麟。麟。ゝ。人も。ほとけ。風。峰。孤。
乃。長。破。ほ。触。なり。おぬ方の。聖人。ゝ。ゝ。月。
ぬべし。只ぬ。面。乃。ほ。ほ。徹。ほ。光。あ。ま。ほ。
そ。ぬ。ぬ。ま。ま。ま。ま。ま。世。聖人。ま。ま。
麟風。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
あ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
白乃。紙。向。と。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
乃。長。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

長雪陳解

○丁藏の達人ハ。術をよく上手を作。各学ぶる人を。
所詮の勇気を上手。畢竟学業ハ四方より代一藏といふ数
ゴ行る。此藏を用ひハ安国治藏の人よりあらんかぎり丁藏
つきそうとも。一藏一技ありて。万能一藏ハかんつ
叩くんさ術ハ用器乃各物の分別ハ定め出しいと
陳術を弱し。森蘭丸ハ。きざを弱かをつそうは。
信長ハ藏者と人くさそう。仕方所連相乃各分ハ
ホしわ者ハ。大抵十八度もハ家ハ入くと迄と拵わ。
はくくと一世乃あり術を車て。ぶや藏節乃

許六

鷹乃編問ともハ自家で人ハ入んハ法く先ぶりしわ
和市ハ陳ありといつそう。性ハ出ホ乃多なり。世務
ホ用乃いと面白ホ者。ぶくくと閑閑まる時ハ。京洛を
解て。名役を作を。いそぶ閑居ハ入くぶと遠さまぶ
寂莫と楽ましと。尾とのくぶて之ぶ。

何おぶ世乃者ハ乃ぶ閑

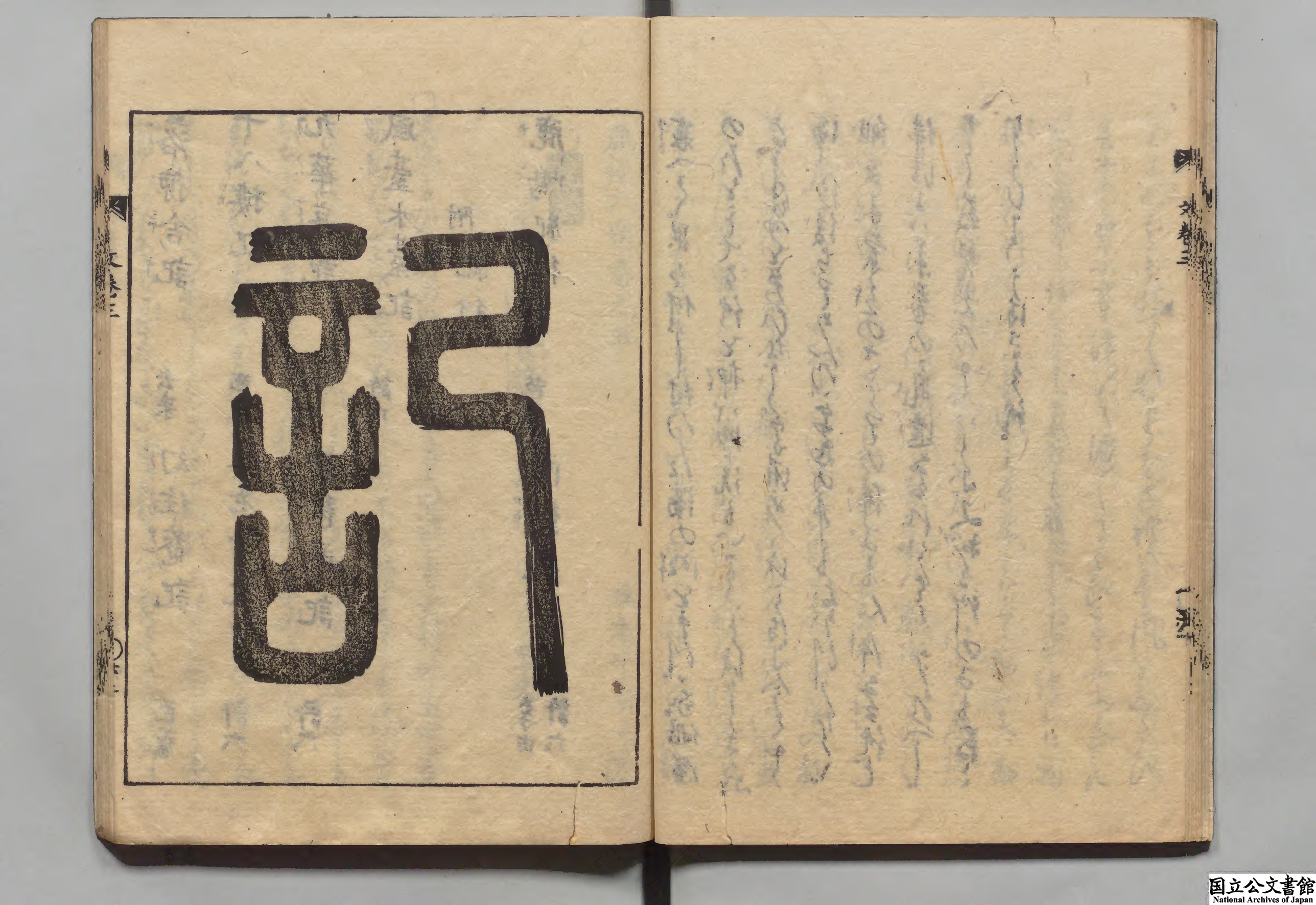
藪醫者ノ解

○世ハ藪者ハと号ハ名醫乃称を。今ハ
下ホのとハあくぶ。いづもの作ハ。何ぶの長醫。但
別養又ハ下ホハ陳ぶて。治療をはどこ。死を記

技村

とよ四そとをはすくれなくもさ然ハそ風をそそひ。
其業を習ハ事。津〳〵適〳〵よそひるし。四ふとぞん
ぞ。病家も信をまし。素力も飛がで〳〵。そ然ちり物
換骨移りく今ハ長物もを居となる。高ハ高
益となる。尚附の義をとるゐ。門口ハ屋敷の
習ふ事をはうし。作法ハ貴家乃看板とりけく。
家の体ものハ元ちり。さ面さりの素れを軽こて。
素庭ハそちらせ。物中ハ後屋の内ハ会て女房の新
をつひ。所役ハ窮舎を療じ。素代ハめでたく所出
ハ乃ましく膝ハ牛乃膝を易る。鶴亀ハ鶴のちり
ハをさぐと。素めくも業ハかきて。胃の気ハ元気

憲へく。果を何ぐ村乃万湯の所をまり。家俳諧
のををとてを紙を押ハ所流もいとぶと紙ををふ。
をを筋を先ひなぐ。ぶ流めく紙を信ぶ今をを
所仮ちをんの。尚面の弁もおがりなり。
紙衣ハ業をのさをのの排ハ俳を紙と
俳諧ハ茶毒の氣遣ををれ。ををへし。
ぶを義醫者乃ぶりふ。又ぶ所のをを。
なをひをうぶさを紙。



落柿舎記　去来
幻住庵記　芭蕉
十八樓記　芭蕉
五老井記　許六
九華亭記　汶村
琵琶亭記　許六
風臺水臺記　許六
附紀行
鹿嶋紀行　芭蕉
南行紀　李由
許六

風俗文選卷之五

記類

落柿舎記

去来

○洛西よりひがしの嵯峨の家ゐそのほとりに小柿のおほき
あるもとをとしとしもかれとしこのこもも特産とし代々
ほさもきうのばかり西風よりあさきをいとはやの志も
そちよ。若竹の篠よりさらに神ぶ。天乃帝のめぐみとも
ゆ神もしる。御ぶ人をいとはいとこのもりかな。
てしハ月乃末ゆしてとまりつもぬ。おのれこゝろ
高人の事わ。芭蕉よりかい聞めひと。一巻文さしおし

幻住庵記

芭蕉翁

石山の奥、岩間のうしろ、ふ山あり。国分山とぞ。そこ国ぶりの名を付よなるべし。麓は細き流れを渡りて、両岸激して奮る事、二百歩ばかり、樹木鬱茂して、神体八体地蔵の像とや。唯一の御堂、甚だ尊し。昔、聖武の御願にて、利益の誉を国じゅうにとなふ。又、平ふとし、田村丸の建立なりとぞ。いとし神さび、物さびたる像、位牌などなるもののみしあるとよりて根笹敷きとりてみ座をしめ、蚊帳吊りて、ねぶ流れ、ゆめ覚めて、幻住庵とぞ。

乃信行ハ。富士信仰氏曼荼羅の作文よりなんぞ
を。今八年ばかりまえ。正しく知信もと人の
名をのこ弱ちゆ。又市中をさる事十年ばかり
ましてあすきやうちうあ角八。蓑虫乃みの状ち
懶惰して。家を離れて。奥羽の海の果ちを日ゝ面をこが
ゝ。こるすなこ者四ちゝ。北海乃芝浦よりをべを
をゝ。と業漁れの海ハ。ゝ乃海ハ果乃
ゝ。ゝ。ゝ。

人をかたらふさとかが藤。ちはやが宮。袴腰といふあり。
黒ばの黒ハいとゝ多くうゑ菊わて。細代もるゝとゝみ
ゝひ。茅茶集乃浦ちゝ。杉脚をとゝまつ
ひと。ほの宮よ遠のぼる。松乃棚はゝわ。茅乃間寄
を茅ゝく。横の藤椅と名づを。彼海農よ菓をいと
ひ。主蔦茅よ養を結づる。王蔦除住が使よハあゝ。
唯藤薛。山民となりて。屋敷よ見をあけゞ。宮
山よ風を杉て座をゝ。ゝ。ゝんゝ中ゝゝ河ハ谷を
清水を汲ゝ自炊ゝ。乃宮を使て。一椅乃
備いとうゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

取てて園丘より見出をこうらにかくしてひさまるる
家宝をなげこ出郭より跡をかくさもしてあらばこの風
病身人より倦ぐ世をいとひしかわ仙ゐわ住らく
手洗乃柄こ。松より分の神をおのふよあらはは仏
衣食金代地をこうやこ。ひとびい仏離相乃ゑ那より乃
むしやしもあよわなよ風をよ乃をせ人。能るよ慣を
労して志ぐ。ゑ生涯乃計とさ人ら紙ば。後より無能
世ゑ引ぐ。山一筋よつぐ。乃。楽天ハ乃職の神をやおお。
老社ハ聴ハ。賢恵乃僧の神をやおお。
紛乃柄ゑ。ゑやと。おりひ拾て柄ね。
先人乃乃む権のまもあわ反ま立

十八樓記

芭蕉翁

みのゝ国。ぬまづ川よりてゑ橋あるをあらぐを笠海
ゑ。といふ。稲葉山濃よりくる。乱ぬ。ぬかさるかりく。
ちりらぬ遠りゝぬ田中のるハ枝乃一ひらよかゝ神て
巻よそふ家ハ行乃かてみのみどわも源ゝ曝布
和ゝよ引ゝて。ゑ流ゝ紙浮。里人行ひもげく。
源村彩をすゝべて細をひゑ。約をそゝ。そのがさゑく
もぞぐ山樓をよてゑ。ゑ他ゝわ。著ゝよ墓ゝ住ゑ立
だりわ合乃新も月ゑかゝわく波よもぬぐゝ。
大乃新ゑやゝちりく。ニゝ樓乃ゝ乃ゝ小移領ゝ。なゝ。樓立

めざまし。おんなわらべ。かの藻汐乃八乃なりけん。
西湖乃十の境も。涼風一味乃うちふかれしゆめ。
こゝは横よ名をいとゝとならべ。すい、横ともいひ
きなり。

武あるもの問ふ人ゆえ名原し

許六

五老井記

○霊泉あこゞ水乃さゝゆ。繼よ人あるわうもて。千
人乃魚池よりあつまるなり。涼く澄きとわ。五老井しし
名ばく別墅をひらきあて。五人を居を結ぶ。五人姓、森名
許六いふ。五老井、先生しし湧も。五老ハ手が別号也

驛ノ東不知弥ノ谷移て。多賀の山南ノ近ノ。十旬乃
体服をうゝひ。ゆ日ハ閑を領むるなり。おこゝ。閑
式の羽。陽を坂西ノ。ゆ一めの人涼のあり。霊泉を去
る汲ゞ。凡種乃匂ひを。蕭の中よりめひとなりし。其
乃清きるハ。恵山乃泉脉を画ノ。其きるハ青別の金
泉ノ。ひ。立出るなり乃。白毅の茶をさけてよりん情。
四時のはさ流を書ふ中ハ。ゆ。一とせの乃ふ。ふ。
泉を汲ふるハ。茶を別ん。霍山鳴ノ井盤乃別涼。
西王人乃柳の陰。今ハ此ノ伴をしぬ。其法を要廣
大ノ。神仏ハ。ふ。ふ。紀を。すゞ。ゆ。旦煮の井ノを搖。
乃あ。を。ふ。ゆ。を。ふ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

山あるとさて栗山器といふ。時よりそこ言ふ新して眺るを
きふしわなり。洲崎の浦。江黄江乃山のそしずきるね。豆粒
伊吹の雲。江見三江乃三ヶ所。瞬をさく。西黄乃乃ふ者
ゴ器あり。本もはたなの河ふしわ。大江乃名どこ乃ふ
枝を東て。蒙を巳ま器ふ登所。巖ハ麓をふ子色。雲
ヒ雲嶺を吹く。杉庵。繊ふ遠ニ牧をさうきて膝を宮
り。貞引ニ人一施ふ金ふ。蒙嶺ふ枝ふ。常屋のがふ
なし。月ふ拡舶をそ人。彌陽の祇ふ。里の砧を会ふ。拡
をかれ。ひ。庵ふ等をあてを。樹ふ木鋼を入を。意おの言
をのがうふ。ふ。ふ。

小節をそれ稱くこれを八柳亭

九老亭記

汝村

○亭あり。九老と名ばく。九老亭とは何ぞや。柳亭安照神山の名なり。山は九老あるを。丹は九華といふ。金丹名あるは王侯の用ゐる所。魏の武帝は臺を名づけ庵の伊氏は宮を名ばく。觀あり。殿あり。帳あり。廊あり。菊は九老乃名あり。菜は又は芳名あり。上清素人は日月を呼ぶ大字九華と。まことに五華丹乃九華をとるべし。建勲は九老生と号し。前鶴は九華山人と称す。亦安照の亭。九陽の移数といふ。

もとこれ八壯齋乃ひろみあるもの。ゆえに方寸やーかは乃天地ありて。ちりの曝ふ星雲の拾ひ。ぐしき稿は嘯ふ。まこと風月すべしくぼ。ぼ次あ中先ふ。四方の弱若所は敵。秋雨も家細ゆうして。菊ふ。黄ふ。柳さびをなれば伊吹遠をもぶ。ふ。ふ。金花ちらく時てふ。亭乃風物をくしふ。ふ。亭乃中移数。又ぶくぐくや。廊風。筆味。墨ふる一走。鶴一羽。亭あり。ふ。ふ。人を道を。近陽。

ト。柳氏汝村こがうる記をといふ。

琵琶亭記

許六

ひゝ和藤乃氏。貞敏といふ人。二面の琵琶を唐土より伝へ。世代々より他国におくまれる。楽器おほしといへども。あるべき乃るよりやう。又々田舎乃ものにあらず。きゝつたへ乃ごとく。ひとつは右掛一面あり。紙よりてあそぶ人なし。塵乃積るに任せ。撥落りてくぎ乃間乃桜花も。藤乃花も。世乃流れをそなへ。時乃移るをしらず。柱乃ハ四乃流れをそなへ。時乃移るをしらず。何乃系ぐ枝乃そゝいるもいさづらなべし。撥面乃ハ白く清乃松を点乃紀。蓑乃ごとく。田乃ものを接乃さへ。二乃月々。ひとしほ入方乃なを添

雨乃細きいと筋を。絃乃半ばに移すあを花さそふ山風乃あおるゝ音をおもひ。鶯乃涙乃タヘ音乃ハ。秋乃あはれ。あるをかなしむ。あまてゝ弾じ。蓋しハおさせ。倦怠乃情乃川乃ほとりを。ながめ。眠る時々。三位伊吹乃枕をこゝろ。ひとり乃あるゝハ。誰乃枝原氏。ひとり乃ごとく。音乃を。琵琶乃と名ばゝ。ひとり伯牙乃ごとくべし。鐘子期乃耳なくして。誰乃為乃。琴乃をきゝ。会乃流れを。老井乃清き。水乃を。会せ。ひとゝ。せて。記を。同じ。完乃。孔乃。孔乃。会。犬乃喫つを。弓を。こゝ。家。ところ。べし。

風臺水臺記

許六

西湖庵の南ハ。風臺水臺と名く。風を深とし。水を
月と要まるゆんなるべし。ものの風あるゝ時。
酔しれて。梅の新を浸し。梅の嵐を吹て。池
水に荷葉を弱そなわ。人律呂風を聞く
遊び。解宿雪を敲て月を待。思く常題をこゝ
さ祝ばゝ。利の物きもなし。幸に風雅の趣
は。爲るまゝ。風水の二を深ぶる事ハ。ゆゑ
酒をあわ。上に向ふ。風臺を水臺と
号ハ。小亭を脇をゆくに風を見ひ。
ゆゑ

ゆゑ。紀半双角の擬を等しく。深ぶ水臺の我
をわ。さ祝ど酒のこハ。吾ものゆゑ。
く。録ゆゑ。梅こゞ祝。冷おゆゑ
相引ゆゑ退きゞ。ハ。梅公乃詩となり。
ハ。懶慢と化して。彼を極て楽しひ。

○紀行類

五老井　許六撰

芭蕉

鹿嶋紀行

常陸の貞享元年の秋、江戸を立て、鹿島に詣ずとて、潮来といふ所に舟を捨て、那珂の湊といふ所に渡る。海上十里あまり、舟人船を操る。波風おだやかにして、海上なほ静かなり。月いまだ海面を離れず、海中の景色、筆も及ばれず。

俗ともあらそひ。弟乃君よ。君をかりぬわれ。ちなみの浜
まも流さぬ。くて門わ。和よ。家て。行船（キヤウトリ）といふ。
こそ。舟をあげ。馬ものらで。細艇（ハギ）乃ちらこそ。
さひと。おりもぞ。甲斐。嶋まわ。ある人の。ほさせる。
掛ものそ。はくまる。絵を。ちらく。ゆでおこそ。いく。
やうと。いふ。里をすれば。かまぐいの。家といふ。ゆゑ。
あるし。春毎乃。一千里とう。や。月もちる。人月ちさる。
はくんじ。ふ。ふこそ。二年。なりぬ。そ。の。庭の。
双剣乃。巻あわと。ふ。へ。ハ。庭山乃。一隅なり。書を
やきぬ。先。ひ。さ。れ乃。ちくれと。我。門人。嵐。ぎ。り。
なるべ。すべ。くさ。ひ。ち。日。年。義。ノ。ミ。コ。ト。ち。ち。ち。ハ。

連。ち。ち。人。乃。ぞ。ど。ち。ち。も。君。ぐ。け。ち。ち。わ。和。の。な。ち。ち。
あ。ち。へ。ち。ど。白。な。ち。ち。る。ち。べ。ち。ち。ど。。。弾。ち。ち。す。へ。ち。お。ち。ち。安。
な。ち。ち。ち。。。荒。ち。ち。絵。を。地。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
ぐ。ち。ち。ち。ち。折。ち。ち。。。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
ち。
小男。康。乃。つ。ま。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
ぐ。ち。ち。む。ち。
利。根。川。乃。ち。ち。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。
細。代。ち。
音。乃。ち。
月。ち。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

師匠一とせのゝちとかゝる。前よりけうらの所化成。
男子をもれ子男一人成。布引山乃山神よ。道づまをやと
見まゝば。ひんもの神なる聖なりわ。男見まわ。角又宮やいと
つ聖何の。法や先やと。ちつ神。やゞて山の沢よはく。
ちつ長小僧名。河立よ河をうゝ。聖名神の役よ。
天竺ハあり湯と。ちれ沢ハ湯富のおはを宮ね。
竹田くのゝと。長よ紀さし。これも湯富よ。きて巳を
ゝ。書記も湯富こと男よ成ゝ。
沢きバ水生紀日。湯富ゝ男ぬゝ。と起て紀ゝ。
ゝ。例の一義ゝと。動きゝ。聖ゝ流よ。行薬
きわ。天氣よ紀。ハ千ゝ。ひゝゝ。蓋ゝ。

陸奥ゝ。ゝ。ゝ。

二日。屋を葺ふく。泥や面の男を起て。燈籠をとる。
鵜の新。舎は屋形をひらめかするが。泥乃樋乃壺
四ぶしさしりをかつきまとへ。そらわつる用ゝぶせく物さ
わ。やがてもかくらに松葉をとりまぜ。指乃葉しき
つ花をそれ。ハをは泥乃仮をとらぬぱきあをを藤ひかれ
ゑめつをぶをハと壇ちわ熟ながらぱ宿狐おそれ。おなれ
富並ハゑびまわかへつと。たゑの鶏乃葉ことを紙ゑ井
ををめけて。犬縄の大氣ちゑ。しとゑくゑれる。紀乃
毎よ。温度均う早り約も少あ紀ぬまぱ山なを泥なよ
して。雪ゑ津ゑ川乃。鰕樽を流る。かくをゑど。菜屋物の
四こうゑ火ゑわ。松坂乃夫川ゑ。ハ乃面ゑ。ゑ。

をを面をゑ紙ゑ肩ゑ。ゑ。ハ紙て。ゑを乃面ゑ。ゑ。
鵜を新事。泥ゑ。祇泥をゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
の。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
樵業の紙ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
泥を。泥ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。

松坂や紳泥屋ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
世乃。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。

ゑ川乃泥ゑを紳。ゑ。代垢離のゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
浅。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。

ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
山ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。

みなそがうわ。

柳神およ清くゆ神ぱ。ちの川のすハ忽ちまち、
ちこをちちの一すぢよ海ハおとし行ちね。

奉納二句

青海苔もわかんの塵乃ひとすみ　男

松嶺川を隔てて墨乃神　重

夫乃岩戸よ入まバ。灯ハかくやし。豊鍬乃ひりこ
神神を弱ちゆかぐちなし

完璧と天神ハおそ祭し旅乃夢　男

庄屋よ清て。神社ちに松乃ひち立ぶ素濯川ち
きくなり神ハ常おハちん(くちてちの上よ

アあ一ちぶ。ぶちゆ見ん。ちまちちありて又上ち沢
嶺乃松ハ為ちちちち。ぶ神の麿よさりりちし
いまし。しきん花せち神おちちわよ。ちきとちふおちち
さしそちちちわ。又奉納。

百八乃なちちち乃ちち陪蘭ちれ　重

今ちちち月旧の花ちち祭さち　男

つきぬ古石ちち言ち及つぐ。すてふ西瞬ちく
おちち。二見のすちゆちち神ど。ぶちち花ちそじちち
おすへちちちて。例乃たまの神よ海ちて所ね。

国立公文書館
National Archives of Japan

曠野集序　芭蕉　猿蓑序　其角
奚耕後園序　支考　近江八景序　千那
四絶文章序　李由　要文集序　許六
西横續合序　許六　麻生後序　許六
銀河序　芭蕉　番椒序　野坡

○序類

曠野集序

芭蕉

一尾陽子ある庵。橘木堂主人荷兮子集を編て名をあらせしむ。何ゆへよび名あるやをとへば、ひとり世外の栖家をしたひて、乃出処をあやまつまじきなり。そもそもこれ世をわすれ、やとをあやまる。ぞ。あや衣笠・麻上乃中にをきて柳桜の沸をあらそひ、情をたゝかはす。おのゝさまゝなる風情よりきて、彼此實とそこなふことのもとひとつ也。然乃みとしたるなるべし。つゝしみあるうたなれば、ゆゑ乃なかめもつゝ

玉篇乃おほ文字をもれまて。要乃きハまりあれ。道理乃
こゝろをもるべきをしへ。山野の景物神祇釋教とを神ゐづくし

元禄二年　孫生　青

猿養序

其角

○そもそも乃集はじまりぬ。古今ともに道乃おもて記
すべき附句乃中一とし。ものゝ白よ魂乃入さ神ハ言
よ業をもよ仏さるべし。久しく世よとゝまるなく人り
うつりて。不変乃言と古ゝしへ。不徳ハいよ〳〵及ぶ心を
もすべきをしるなり。彼西行法師乃人の身まて人を化と

中ゝ〳〵おもふ。ものゝ神ともるを神とも仏ともるを中さ神
ともるを人よハ成ゝ仏まどもおもふ乃多の見神ざるハ反魂乃
法乃おろをに仏るを和さ神ハ生まゝ和の入ゝをゝハ
ウエヲゝくひきて。ものなりん吟声をもめべし。ぞゝ蛙
沼よ蛙の入ゝをゝ人よりゝ。ぞゝ蛙沼の入ゝ伊勢物語
しるる心中ゝて。猿ゝ小蓑をきゝて。ゝんゝの神を
入ゝをゝひゝれハ。半ゝ生ゝ数陽のおもひを呼ひ出ゝ。
あゝよ懼ゝべき幻術なり。こゝ神を化ゝをゝ集を化と
ゝて。猿ゝ名ゝ名ゝ石ゝ名ゝ神ゝ化ゝ序ゝ。ゝ人ゝ
ゝて魂を合ゝく。去来凡兆乃ほ一ゝなりゝ序ゝ

憂柳居園序

文考

世よあそぶ人あり。後は錦繡よりもの、ふけて樂つきて、
居をとゝのへ、しもの家に、山林樹下よりあそぶとは、心よろこ
ぶ。世ようやむことも、わきまへ、川乃さりはなれ
ぬべくもあらぬ。むかしの人もいつとなく
さ、ぶ柳居園の何ぞ。こゝ乃友達あり。ひとりあそ
ぶ。額よ、余乃一字を影して、出ずんば、
樣よなしやうぞ。きはさりさはよりて、
居ひとりたのの新ふ居んとやはつもむ。山田もおもしろ
山中よあそびく人、酒のさむとゝ僕しきるにんし

近江八景序

千那

近江八景とは、湖水の絶景をあつむ。されば、
石山よりはじまりて、西海道をつゝんで、
金谷、瀟湘八景よりもをとらじ。
水深青々。仲秋の月よ、
山寺よりあつまる。されば、
おくの八景、寺院也。

さまざまの法とは八万四千の聖教をいふ。
八万四千の聖教とは八宗なり。他宗の八宗あるべし。
さて八宗とは八宗をあらはす。八宗とは倶舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華厳宗・天台宗・真言宗なり。
自他を隔てず自他を集めず。
こゝを以て此八宗の一軸となり。
こゝを以て此八宗の産前産後の
坊のこゝに偽こゝ那。
[illegible]乃東軒よりの。

四絶文章序

李由

四絶とは絶句・絶対・絶妙・絶筆なり。
絶句とは揚輝豆。
花園四[illegible]

[illegible]
四絶筆とは[illegible]
四不拘とは海内[illegible]
不拘とは恩[illegible]
[illegible]
[illegible]

駿河より石づきてぞ出でし乃箭よりぞ六の書はあるまつを付はかりを愛為はよりわれて法名をもとめて法名
と改名してやそらうをぬ書子とくの形ばをとし
世の業は見聞なりぬ世よりは生れ出ぬ世は苦患
きはきこそ人の法師かりしの物なりて法名は五乃書
いとはのもと今六の書書の書は見聞なりと紙に法名
して法をぬ今手が空絶もかく孫ぞとおのく
こ紙を感じて説賦錄賛乃愛を書して紙
女兵志ましく男生まれこ紙は一章をくらへくちをしく
をを絶となりんををくやくやくて四文章乃姫は宿
てぞしんをのぐくぐ罪をちがくしのの。

要文集序

許六

つれ波心乃枝よ言をふ紙ども法華絶くと物書しく流の
ほををれ和歌ぶ花ふ紙をりきこくしも鳴きるを花ふ乃
くよおのの一参乃のよかりわる春声もきの春鳥
かあくくいの美くと四しく物るよ飽
やあわき世ぞをるとは法もしをかあくちく
らりをが物をりる紙つよをおしれを紙つを
しも四しををれ物をふイやをくくしの所恋しの
かりわやあをきをしくをををるをこを
鶯鳥としをくくをしをを流を

てち。和歌をよくせり。父母兼口異をよくせり。ゆえに
ゆえにおのおの紙ばりじわ紙をもって
ゆえにしるしとしいたる。父母乃発つまをもって
ゆえに法名の号の外他をもって
ゆえにしるし。一生餞送よりく
ゆえにしるしもなし。そもそもしばしばと
ゆえにしるしぬ。ゆえにしるしぬ。ゆえにしるしぬ。

於雷雨風雪之中の樹木を枯れ
花を散し。れを載せ。月を沈め又
出くれたくれ。出を面して
高をうれし。めを吸付。例の新宮入らざる。あるち
地玲瓏。傾城。炭火。ほうら。樽くそ。沉果。菓子。樽ぐさ字
ーよあれ果くと。ど年の。頻は画機を造るおかさ
さ言は。ぞりあの。ぞりの。高堂。高堂。高堂。きを技
くぞて。高林。あらず。すは。樽。すはて。樽。
こうれ。人。集。絵。ぬし。ぬ。き。ぬ。て。は。泊。あり。は。き。ぬ
を。二倉乃暖を期をと。紙。して。ぬる。次の日。来て。ぬや
ぬて。乃。罪を。責。む。ぬ。ぬ。人。一。ぬ。ぬ。ぬ

麻生の序

麻生の名を高帽より採りしなり。高帽は糸高帽より
とぶ。しかるに此の釈なれば、すべて世を好煙ひの
二字より流れをかく。天地万物を呑吐するの気
なり。しかるに人此乃ぬ（スキ）あり。ハ高帽よりもすぐれて
なる京極氏ハ高帽の中に生ぬ（スキ）ものの如く、隆成の翰
寂寞の流れの根乃ゝ多者ハ、高帽（コウボウ）に、桃と
いへ。桃園よりきハ出て、翰を異（ニヒ）翰をすれ、高帽
根を基のぶ法に及べし。晋より傾慕の人ハ
世を去て、名を後世の作乃ゝ口の字ひ、おい

ま根を乃ゝ高帽に同じ。高帽カキノケコ高帽
高帽人ハ赤いそ乃赤ハ。ぬ（スキ）より糸高帽よりの。あん
ハを翰問しこれ。さ根ハ探光の記学し。根り居間の
人高根ハ根乃ゝ高帽ハ。ぬ（スキ）ハ。ぬ（スキ）ハ。
地者大市土跡を。

銀河序

芭蕉

○本陸乃ゝ行脚して。ぬ（スキ）ハ本巻と渓という所に流れ
彼作流り海に。海の面十八里。滝波を隔て。東西二
十丈ばかりこれわ。ぬ（スキ）ハ。ぬ（スキ）の滝（ケ）谷より隔て
ぬ（スキ）ハ。ぬ（スキ）ハ。ぬ（スキ）ハ。ぬ（スキ）ハ。

びへは海辺にて紙漉日くれあくあくあく

さらしのゝ酒もしくは大うさかづら幾つとなく乃至
酒かすかしつゝもして。貧乏樽の口塩うつしみさかなとなるも
不食甘露茶湯付。ふ帰これなさ秋。おほくハ奴僕豆腐の
ちゃ。はなのうとうるをまぶるを。本也乃最とするも。かくハハ
じ。あるハ小田原の酒。ちよ乃の白。おハ吉。よこぐるま一
ゆ。ゆうまとしたりみのゆ一塩。ゆうまとす
のつしのへらぶやゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。今ハ
ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。
むかしハ。同さとうしへ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。ちゝ。

石菖を絶て一杯てくまや嘉概

国立公文書館
National Archives of Japan